〈ポスター発表の要旨〉

主体的・対話的で深い学びを実現する算数科学習
～子どもの問いに着目して～

教育デザインコース　臨床教育領域
小林　広昭

はじめに

「主体的・対話的で深い学び」について、告示された学習指導要領（H29.3.31）と中教審答申（H28.12.21）をもとに、一つの学習の流れの中で、モデルを考えてみた。

1　主体的な学びのための問い

子どもがある事象や場面に出会ったときに、それに対して思いや願いをもつことがまずは必要と考える。たとえば、「いくつあるんだろう？」「僕にもできるかな？」「やってみたい。」そういう思いや願いから問いが生まれると考えた。子ども自身が問いをもたなければ、主体的な学びにはならない。

2　対話的な学びと問い

子ども自ら問いをもち、取り組むことで、自分なりの答えなり、考えをもつことになる。そうなった子どもたちは、自分の答えを友達に聞いてもらい、評価してもらいたいと考える。自分の考えを知ってもらいたいと同時に、友達はどんなやり方をしたのかも知りたいと考える。これが、対話的な学びのスタートと考える。

複数のやり方や考え方が、出てくると、子どもたちは、「より簡単なものは、」「わかりやすいのは。」「間違えない方法は。」・・・等様々な方法を、簡潔・明瞭・的確や統合的・発展的に考察したり、筋道立てて考えたり、目的に応じて考えたりするようになる。そこからより多様な視点で考えを高めたり、簡単さの中身を論議することで本質をとらえることにつながると考える。これは、まさに対話的な学びとなると考える。

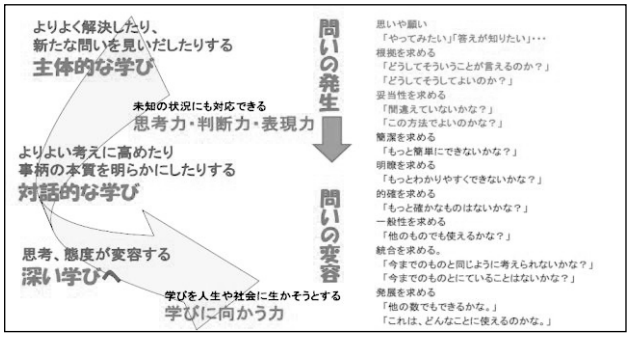
3　深い学びと問い

対話的な学びでは、はじめの答えを知りたい、やり方を知りたいから簡潔・明瞭・的確や統合的・発展的な考察へと問いが変容していく。変容した問いを集団で追求していく過程で、わかりやすさ一つとってみても、個人で様々な捉えや考えが出され、そこから多様な見方考え方に触れることになる。このような活動の繰り返しが、子どもの思考や態度を変容させる学び、つまり深い学びにつながっていくと考える。

場面や事象から問いを見いだし、取り組み、さらに問いを変容させ、対話していく。そして、自分なりの見方や考え方を変容させていく。このような繰り返しが、よりよい見方や考え方を獲得するとともに、友達と学び合うことを通して、より深い学びにつながっていくことを実感し、自らの学びへの意欲を高めていくことになる。

これらのことについて、1年生の算数の授業、１０のまとまりを作るよさの場面を提示して具体例をあげた。

4　問いと学びの関係を次にまとめた。



引用・参考文献

・小学校学習指導要領 (H29.3.3.1 告示)
・中央教育審議会答申 (H28.12.21)